

国 語 科

直 寄 宏 美
高 田 徹
山 本 瑞 穂

1 国語科における知識創造とは

国語科における「知識創造」を以下のように定義する。

伝え合う力を高める活動を通して 自らの言語生活をより豊かにしていくための確かな国語力を培う営み

* 1 確かな国語力

- ①言葉から広がるイメージを豊かに想像し、言語化する力。相手意識・目的意識・場面意識に基づいた、言葉を選んで表現できる力。
- ②様々な事象・言語に対する表現が理解できるといえる基礎的な力。表現することの中に、問題を見抜くことのできる力。
- ③文章を読んだときに自分の生活経験や既存知識に基づいて考えられる力。
- ④事象と事象との関係を客観的に考え、適切な論理的思考ができる力。
- ⑤事象として自分の考えを相手に分したり、意見を出したり、言い分を述べていく力。
- ⑥表現されていることの意味を批判的に（クリティカル）見ると同時に相手との意見が対等な形で受け取れる力。
- ⑦生きた読み書きの中で読むことと書くこと。

今、社会では真に生きて働く確かな国語力を身につけることが要求されている。子どもに不足している力として、「相手や目的に応じ、自分の考えを論理的に書く力」「根拠を明確にしながら自分の考え方を述べる力」「批判的に見たものを受容的に表現する力」「読書力」などがある。そこで本年度、私たちは、言語生活を豊かにし、実生活に生かすことのできる「確かな国語力」*1を培うことを重点目標として、国語科学習に取り組むこととした。ここで言う「確かな国語力」とは、以下の六点であると考えた。

①豊かな語彙・豊かな想像力、②認識力・判断力、③熟考する力、④論理的な思考力・表現力、⑤批判的思考力・表現力、⑥読書力、ととらえた。

この確かな国語力を培うために、「伝え合う力を高める活動」を中心にすえ、学習を進めていくこととした。自分の思いを素直に表現し、他者と考えを比較したり、分類したりする場面で、相手を説得できる表現の仕方、より論理的な伝え方、受容的な聞き方、批判的な見方を子どもが模索していく中で、伝え合う力を高めることができた。双方向的で多様な、質の高い「伝え合い」の場を多く経験することで、協同的コミュニケーションの楽しさを享受し、自らの言語感覚を磨き、生きて働く確かな国語力を身につけていくものにととらえた。

2 国語科における「かかわり」の活性化

国語科における「かかわり」の活性化を以下の二点ととらえる。

- ・ 目的に応じた「読む」「話す・聞く」「書く」活動の多様性を発見し、場面意識・目的意識・相手意識をもち、よりよく伝え合うための表現方法の改善を行おうとする状態。
- ・ 読者として子どもたちが主体的、論理的に作品を読み、根拠を明らかにしながら、構築した自分自身の考えを交流することで、違う価値観と出会い、より自分の考えを深めようとする状態。

3 「かかわり」を活性化するために

(1) よりよく伝え合うために「かかわり」の有用性の自覚を促す

「かかわり」の有用性を自覚させるには、子ども自身が「かかわり」のスキルそのものを身につけているかどうかは課題となる。ここでは子どもの話し手と聞き手による「相互作用スキル」を向上させることが重要なポイントとなる。一般的に子どもは「話すこと」のスキル習得へ目を向けがちである。だが今年度、国語科では「聞くこと」のスキルを身につけることに重点をおく相互作用スキルの向上をめざす。つまり子どもが「伝えたい」と思えるような「よき聞き手」を育成するのである。聞き手には、話し手に対し、より向上できるような修正案を出したり、批評をしたり、評価を行ったりというスキルが要求される。

「聞くこと」のスキル*2を身につけるために、必要な手だては次の通りである。

- ・ 聞き方のよい姿をつかませるために、返事・反応・受け答えなどの、身につけるべきソーシャルスキルの具体像をモデリングで示す。
- ・ 録画した伝え合いの場面を見せ、聞き手としての自分の姿を客観的に見るこ

*2「聞くこと」のスキル

- ・視線・表情・身振り・手振りなどの非言語コミュニケーションを大切にす。
- ・話し手の話の内容のポイントを「キーワード」を意識して聞き取る。
- ・重要事項を簡潔に図などを効果的に使ってメモする。
- ・自分の考えと比較しながら聞き、相違点と共通点を色分けなどして明確に区別する。
- ・批判するだけでなく、自分ならこうするという提案を出せるほどに熟考する。
- ・話し手が真に伝えたいことを引き出す受け止め方、「なぜそ：考えたのか」「何からそれを思ったのか」という「問いのスキル」を身につける。

モニタリング

- ・自己認識の状態を正しく把握すること

とで、自己の聞き方をモニタリングできるようにする。

- ・聞き取った重要ポイントや浮かんだ自分の考えをメモをしながら聞く。
- ・質問事項をまとめるための時間を確保する。
- ・観点を明確にした評価語彙集を子どもと共に作成し、配布または掲示し、蓄積していき、相互評価場面で活用するように促す。

こうした受容的な聞き方・受け止め方をしてくれる仲間との交流の中で、必然性のある「かかわり」が生まれ、内実のあるペア学習、グループ学習、一斉学習が行われることになる。相互作用のある交流を多く経験させることが「かかわり」を活性化するためには重要である。また教師は、有効な「伝え合いスキル」を身につけるための手引きとなる適切なワークシート開発を行うことも重要である。

「読むこと」では、読者としての子どもが主体的な読みを行い、自分の視点から作品を解釈する。まず、個々の創造的な読みを保障し、子ども同士の「対話」の中で自分の考えや読みの視点を提出する。その多様な解釈と声が交換しあえる場と状況の中で意味ある「対話」が生まれ、自己の読みの変容が起こる。こうした自己改変を行うことが読みを深めていくことにつながる。ここでの変容は、伝え合う中で、他からの批判や他との対立があってこそ起こりえるのである。

(2) 異なる価値観に出会う場を設定し差異への気づきを促す

互いの差異に気づかせるためには、まずは共通の土台にのせ、共通の視点をもたせることが必要となってくる。国語科における「書く」「話す・聞く」「読む」の三観点にしたがって述べる。

フォーマットを提示

「書くこと」においては、様々なフォーマットに従って文章を書く経験を十分積ませることが必要である。ある意図をもって用意された型の中で事実・根拠・意見などを分けて文章を書くことになり、子ども同士が共通の視点で、お互いの書きぶりを見つめるため、差異を発見しやすい。その差異を比較・検討することで、意見を明確に伝えるための論理力・自己表現力を身につけることができる。書かれた文章を子ども同士で相互評価し、協同で推敲を重ねていくことで、批判的な助言をしたり、それを受け入れたりする。その過程で、自分の文章を改善し、より説得力のある文章を構築しようとする姿勢が身についていく。

情報格差

「聞くこと・話すこと」では、聞き合いを有効に機能させるために情報格差（インフォメーションギャップ）を生かす。特にペア・グループでの話し合いでは、情報量や情報の質の違いなどの差異が明らかな相手と組ませる。そうすることで自分の知らない情報を得ようと真剣に相手の話に耳を傾ける。また伝える側は、聞き手との情報量の差があるため、いかに分かりやすく伝えるかを工夫する。情報の差を埋めるために、活発な双方向的コミュニケーションを取ろうとするようになる。

「読むこと」では、目的に応じた「比べ読み」を取り入れる。たとえば、知識や情報を分かりやすく伝えようとして書かれた説明文と、同じテーマで書かれた物語的な文章と読み比べることによって、説明文の明快さが浮き彫りになる。二つの資料の比較を観点を絞って、話し合うことで、文体や情報量の違いに気づいたり、表現の仕方（図や絵、写真の効果など）の差異を見つけたりできるようにする。あるいは、説明文や物語文のレビューを書き、自分と友達との感想や意見の違いを話し合いを通して明確にし、その背景を探り、互いに理解し合う。その過程を経て「比べて読む」などの読書活動を楽しむことができるようにする。

このように「かかわり」を活性化することによって、より充実した国語力を育成し、国語科における知識創造を充実させ、やがては、自力で知識創造が可能となる自主学習力を身につけていくようになる。

4 実践例 —2年—

(1) 単元名 紹介します ぼくの王さま わたしの王さま

(2) 本単元における知識創造

王さまシリーズの紹介を通して シリーズ作品を読む楽しさを実感し さらに多読しようとする

本学級の子どもは、本が好きな子が大変多い。しかし、その読書傾向を見てみると、自分の興味のあるものだけに偏りがちである。また、本を読む楽しみをその子なりに感じている子もいれば、勉強のためとらえている子もいる。また、少数ではあるが、本を読むことに抵抗を感じている子もいる。

寺村輝夫の代表作である「王さまシリーズ」は、50話を超える。主人公の王様は、いばりんぼうでわがままで、時にはうそつき、忘れん坊、おまけに食いしん坊・・・と並べ立てたらきりがなほどさまさまの顔を持つ人物である。本単元では、王様シリーズを読むことで、主人公および登場人物のキャラクターのおもしろさ・各編ごとの人間関係や事件展開の違いというシリーズの魅力を知り、読む楽しみを味わうことが出来るようになる。と同時に、主人公を中心とする人物相互の関係や各人物の特徴的な性格が行動および会話に象徴されていることをつかむ「人物を読む」力を獲得する。さらに、シリーズの中から一番お気に入りの王さまを紹介するブックトークをする。その時に、自分と違った王様のとらえ方を知ることで、読んでいないお話を読みたいという想いを持つ。そのことが多読につながっていく。

(3) 「かかわり」を活性化するために

① 本単元における「かかわり」の活性化

- ・自分のとらえた王様を友だちに分かりやすく紹介するために、話し方や提示の仕方や聞き方を工夫しようとする状態。
- ・お気に入りの王様を交流し合うことで、王様に対する自分のイメージを広げたり、自分の考えが揺さぶられ、他のお話を読もうとする状態。

② 本単元における「かかわり」を活性化する手だて

(ア) 王様の性格の多様性に気づかせる手段と時間を確保する

絵本「あいうえおうさま」を用いて、王様の性格を表す語彙をマーキングし、多くの性格語彙があることに気づかせる。そして、お気に入りの王様の性格を自分なりの言葉で仲間と交流し合うことで、自分の気づかなかった王様の性格があることに気づかせる。そうすることで、もっといろいろな性格の王様を探したいという意欲づけとする。

(イ) 相手によく伝わる紹介文のフォーマットを示す

「木の上にベッド」を用いて、王さま紹介のモデル学習をする。まず、本文中の地の文や会話文から王様の性格を表すキーワードをマーキングして、把握する。そして、自分なりの王様のイメージをワークシートにまとめさせる。次に、長さの違う3つのあらすじモデルを比べ読みし、事件の初めと終わりを明確にするにストーリー展開と人物の性格が明確になるための言葉や特徴的な会話を入れることなどのあらすじを書くためのポイントをつかむ。それを生かしながらあらすじをまとめる。さらに、王様の性格に対する自分なりのコメントをつけ、紹介文を仕上げる。

(ウ) 話し方スキルや聞き方スキルの向上を図る

王さま紹介をする際、話し手は、聞き手によく分かるように速さや間の取り方に気をつけたり、聞き返したりするだけでなく、ペープサートや挿絵を使ったり、本を持って話したりという提示の仕方も工夫させたい。聞き手も、反応しながら聞く、うなずく、問い返す、質問するなどして話し手が伝えたいことを確実に受け止めさせたい。このような双方向の紹介活動を通じて、さまざまな王さま像にふれ、他のお話も読みたいという気持ちが生まれ、多読を促す。

(4) 単元計画 (総時数 15 時限)

主な活動と内容	「かかわり」を活性化する手だてと意図		
<p>1 既習をふりかえり 学習課題を設定する</p> <p><同じ主人公が出ているお話を読んだことがありますか></p> <ul style="list-style-type: none"> ・シリーズって言うんだよ。いろいろなシリーズがあるんだね。 <p><「あいうえおうさま」を読んでみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・王さまはわがままだ。でも、まだまだ違う王様がいるかもね。 <p><<王様シリーズを読んで お気に入りの王様を紹介しよう>></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習計画を立てよう。 ・王さまシリーズを読んでいこう。 	<p>想起・表出</p> <p>まず、ワークシートで今まで読んだシリーズ作品の作者や登場人物をまとめる。それを話し合うことで、シリーズについて知らせ、自分のシリーズ読書傾向を自覚させる。次に、絵本「あいうえおうさま」を読み性格を表す言葉をマーキングすることで、性格を表す語彙を明確にする。それを出し合う中で、主人公である王様の性格の多様性に気づかせ、学習課題を設定する。王様シリーズの並行読書を始める。紹介文を書くための、ブックリストを用意し、紹介したいお話をチェックさせるようにする。</p>		
<p>2 シリーズ作品の読み方と紹介の仕方をつかむ</p> <p><「木の上にペット」の王さまを紹介しよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・紹介するときはどんなお話が分かるといいね。 <p><あらすじをかいてみよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事件の始まりと終わりをはっきりさせよう。 ・人物の性格が分かるように書いてみよう。あらすじがあるといい。 ・王様について思ったことも書いてほしいね。 <p><紹介文を書いてペアの友だちに聞いてもらおう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・紹介文が書けたぞ。聞いてもらおう。 <p><どうしたらよく分かる紹介になるかな></p> <table border="1" data-bbox="167 1025 772 1245"> <tr> <td data-bbox="167 1025 485 1245"> <p>話し手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声で話す ・聞き返しながら話す ・「質問はありませんか」と聞く ・ペープサートを使う </td> <td data-bbox="485 1025 772 1245"> <p>聞き手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾きながら聞く ・分からないところは質問する ・いいところを言う </td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・紹介のシナリオを書いてよくわかる紹介にしよう。 ・同じお話なのに、わたしと〇〇さんの王さまは違うよ。 ・もっといろんな王さまを紹介してみたいな。 	<p>話し手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声で話す ・聞き返しながら話す ・「質問はありませんか」と聞く ・ペープサートを使う 	<p>聞き手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾きながら聞く ・分からないところは質問する ・いいところを言う 	<p>共有</p> <p>王さまの性格の特徴をはっきりととらえるために、性格を表す表現を地の文や会話文の中からも見つけさせ、マーキングさせる。その上で、表にまとめたワークシートに記入することで明確にとらえることができるようにする。</p> <p>長さの違う三つのあらすじを比べ読みさせることで、あらすじを書くポイントをつかませる。そのために、同じような表現と違う表現を色分けしたり、矢印で結んだりする言語操作を行わせる。</p> <p>紹介するためには、紹介文の内容だけでなく説明の仕方が大切である。そこで、隣同士で聴き合う活動を行い、相互評価し合う。うまくいかないペアには、分かりやすく説明しているペアの紹介を聞かせモデル学習させ、よく分かる説明の仕方に気づかせたい。その後、よく分かる紹介のポイントを話し手と聞き手の両面から明確にする。そして、ポイントを意識しながら、紹介のシナリオ作りに取り組みさせる。シナリオでは、すべてを書くのではなく、ポイントを明確にして要点だけを書き、説明するようにさせる。</p>
<p>話し手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした声で話す ・聞き返しながら話す ・「質問はありませんか」と聞く ・ペープサートを使う 	<p>聞き手</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾きながら聞く ・分からないところは質問する ・いいところを言う 		
<p>3 自分の選んだお話の紹介文をまとめ 紹介シナリオを書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしは、「王さまめいたんてい」にしよう。初めにあらすじを話そう。そして、聞く人にどんな王様だと思うか質問しよう。 	<p>表出</p> <p>自分の選んだお話で紹介文を書く際には、モデル学習でつかんだ紹介のポイントを生かしつつ、その子のオリジナリティが出るよう、ワークシートを工夫する。</p>		
<p>4 王さまミニブックトークをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくの王様はどんな王様が当ててください。ある日、本を読もうとした王様は、めがねがないので大騒ぎして部屋中をさがします。さあ、この王様は・・・ <p><読みたくなった王さまはどんな王だった></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくは、「何でもほしがりや」の王さまを読みたいです。 ・いろいろな王さまがいたよ。みんなそれぞれ読んでみたい王さまのお話が見つかったよ。 	<p>表出</p> <p>ミニブックトークでは、出来るだけたくさんさんの王さまと出会わせたい。そこで、ガイド役とゲスト役に分け、役割を交代して進めさせる。</p> <p>共有・結合</p> <p>ブックトークの後、一番読んでみたいと思った王さまを決め、理由を明らかにして付箋に書く。それを交流し合う中で、お互いの感じ方の違いを理解させる。</p>		
<p>5 王さまシリーズの他のお話を多読する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度は、この王様を読んでみようかな。 ・お気に入りの王さま紹介ポスターを作ろう。 ・ポスターと本を持って、1組さんや3組さん3年生へ紹介しに行こう。 	<p>表出</p> <p>他のクラスや他学年に分かってもらえるように王さまの性格語彙を活用することができるようにする。</p>		

T1: どの王さまがいましたか

C1: 「わ」のところで分かります。わがままな王さまです。

C2: 「お」のところで分かります。おかしな王さまです。

(中略)

C3: 「た」の王さまは、だましています。だから、いじわる王さまです。

T2: C3さんの見つけた王さま、みんなと違うの分かるかな。

C4: 他の人は、書いてある言葉そのままだけど、C3さんは違います。

C5: 王さまのしていることから、どんな王さまか考えています。

C6: みんなのは、どんな王さまか分かる言葉そのままです。

T3: していることからどんな王さまかわかるんですね。

C7: ぼくが見つけた「そ」の王さまは、C4さんのみたいにあわててぞうにのっておこちたおこちよこちよい王さまです。

C8: 「せ」の王さまは、せっけんをわすれるから、せっかちです。

C9: 王さまのしていることを考えるとまだまだありそうです。

T4: ワークで王さまのしていることで、どんな王さまか分かるところをマーキングしましょう。

C10: 「れ」の王さまは、こっそり冷蔵庫を開けるなんていたずら者だと思えます。

C11: 「ほ」の王様はほらをふくなんてかわいいと思います。

(中略)

C12: もっといろんな王さまがいるんじゃないかな。

C13: もっと王さまをさがしたい。王さまの本を読んでみたい。見つけた王さまを1年生の時みたいに紹介したい。

T4: 王さまシリーズは、こんなにあります。(準備してあったシリーズを紹介する)

C13: 読んでみたい。もっといろいろな王さまが見つかるよ。

T5: どうやって勉強を進めていくといいかな。

C14: 王さまシリーズを読まなくてはいけないよ。

C15: 紹介の仕方が分からないから、紹介の仕方を勉強したい。

その後、見つけた王さまを話し合った。子どもからは、「わがまま」「わからずや」などさまざま王さまの性格が出された。「まだまだありそう」「どんな王様があるか知りたい」という声も上がった。さらに、それを交流していく中で、左記の授業記録のC3の発言が出てきた。C3は、書いてある王さまの行動を読んで、行動に対する性格語彙を当てはめたのである。それまでの意見は、すべて性格語彙を出すだけであった。そこで、その違いを考えさせるという教師の手だてにより、性格を表す言葉以外に、王様の行動でも性格が分かることがはっきりした。そして、もう一度ワークを使い、性格が分かる行動にマーキングした。今まで気づけなかった王さまの性格に気づきだした子どもの中に、C11やC12の発言からも分かるように「もっと見つけたい」という気持ちが高まった。C3の考えを広めることで、かかわりが活性化し、読みたいという気持ちが高まった。

そこで、用意してあった王さまシリーズを紹介した。王さまシリーズは、全部で10巻までであるが、短いお話がたくさんあり抵抗なく読めると思われるはじめの8巻を提示した。ほ

資料3 見つけた王さまの話し合い

とんどの子が、「早く読んでみたい」「読みたい」とやる気満々であったが、8冊という本の数に抵抗を感じ

ている子もいた。しかし、「一人が全部読むことは大変だけど 紹介し合ったらいろんな王さまが分かるよ」「みんなの見つけた王さまを聞いてみたいね」という声があがった。そこで、単元のめあて「王さまシリーズを読んで、お気に入りの王さまを紹介しよう」を設定した。そして、学習をどのように進めるかを確認し、①王さまシリーズを読み始める②紹介の仕方の勉強をする③紹介する④紹介する本を決める⑤ミニブックトークをする⑥王さま紹介ポスターを作るという学習計画を立てた。さっそく、並行読書が始まった。ブックリスト「お気に入りの王さまを見つけよう」をもたせて、見つけた王さまを記入させていった。どの子も題名や目次を手がかりに自分の読みたい本を選んで読み進め、お気に入りの王さまを見つけていった。

王さまシリーズブックリスト
お気に入りの王さまを見つけよう!!

★あなたのお気に入りの王さまはどれですか? ○: お気に入り
◎: 読んでみたい、みんなに話したい

お題のたいり	どんな王さま	お気に入り?	◎
① ぞうのたまごのたまごやき	くいんぼうの王さま	○	◎
② ちやんぼんぼんのかきかぶり	おたけの王さま	○	◎
③ フジとサトウの宝飾ばこ	うなをつく王さま	○	◎
④ サークスにはいた王さま	びりり大蛇の王さま	○	◎

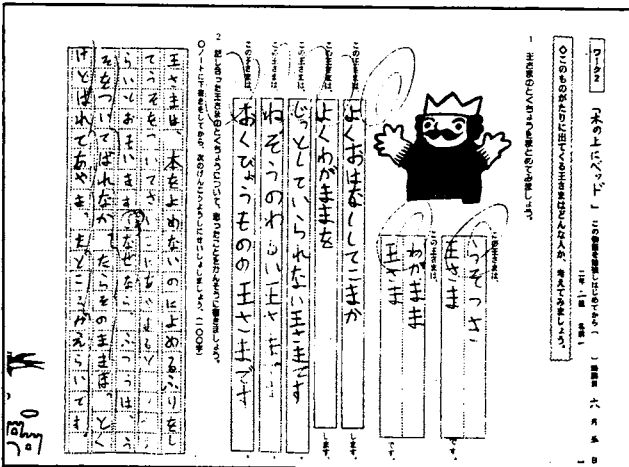
お気に入り(◎) (お気に入り)

お題のたいり	どんな王さま	お気に入り?	◎
① おしりべりなたまごやき	わはな王さま	○	◎
② 木のにおいパウンド	おたけの王さま	○	◎
③ フジの宝飾	ないてあはれる王さま	○	◎
④ 金だまごのふりか	いしは王さま	○	◎
⑤ なんでもほしほしがりや	いしは王さま	○	◎
⑥ ハクハクとハクハク	へんなごころの王さま	○	◎
⑦ ぶせきのぼんご	ひくろ王さま	○	◎
⑧ わすれたおすれんぼ	めすれいた王さま	○	◎
⑨ いいことないしよ	わかま王さま	○	◎
⑩ つつとつとつとつとつと	ふくろの王さま	○	◎
⑪ とさよ動物園	うれしくんた王さま	○	◎

資料4 ブックリスト

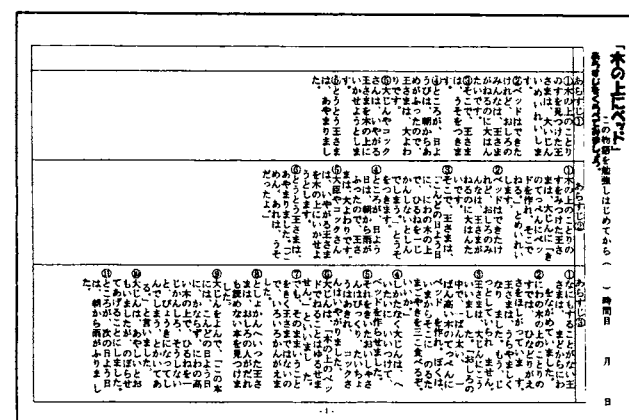
② 相手によく分かる紹介文のフォーマットを示す

学習計画を受けて、まず、何を紹介するかを話し合った。紹介文を書いた経験のある子どもが三分の二と多かったため、主人公を中心にすることを確認した上で、既習を生かして、紹介文の内容を決めた。紹介文は、題名、王さまの性格、あらすじ、王さまに対するコメントの4つとすることにした。しかし、新しい学習であるため、子どもの不安感が大きかった。



資料5 王さま性格ワーク

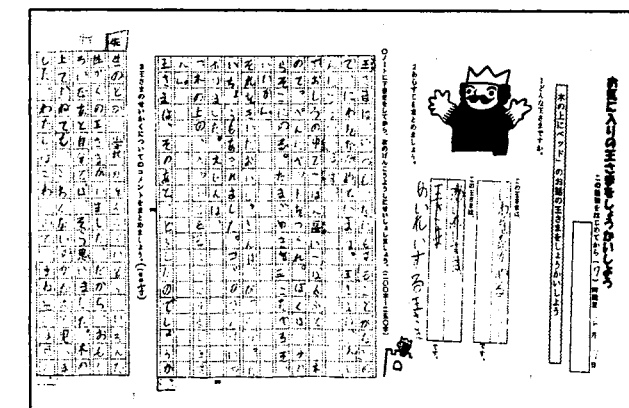
そこで、「木の上にベッド」を用いて、モデル学習をし、紹介文の書き方をつかむことにした。「あいうえおうさま」の学習で性格は、それをそのまま示している性格語彙と王さまの行動からわかることを学習できた。そこでまず、本文中の地の文や会話文から王さまの性格が表れているキーワードをマ



資料6 あらすじワーク

ーキングさせた。どの子も抵抗なく取り組むことができた。そのあと、王さまの性格の特徴を把握した(資料5)。このワークシートは、王さまの特徴を性格語彙と行動に分けて記入するように作ってあるため、性格と行動がつながっていることに気づくことができた。

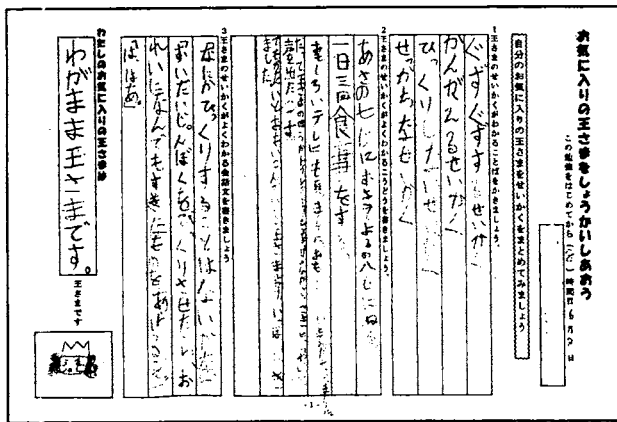
次は、あらすじの書き方である。あらすじを書くのは、初めての子がほとんどであった。そこで、モデル3例(100字、216字、500字)を比べ読みし、その違いを明確にしていく中であらすじを書くポイントをつかませることにした(資料6)。まず、子どもが驚いたのは、長さの違いであった。その後、文の内容を比較した。同じ内容の文同士を同じ色で囲み、色分けした。また、お話のはじめ、なか、おわりを明確にし、色分けした。色分けという言語操作により、3つの文の共通点を明確にすることで、違いがよく指摘できた。子どもは、「短いのは大事な



資料7 木の上にベッド紹介ワーク

ことだけを書いている」「一番短いのは会話文がない」「一番短いだと簡単すぎてよくわからない」「会話文があった方が王さまの性格が分かるみたいだ」「出てくる人が違う」「どのあらすじも事件の始まりが書いてある」「最後どうなるか書いてないあらすじもある」と、活発に意見を出すことができた。それから、あらすじを書くポイントをまとめた。それは、「王さまの性格が分かるように書く」「性格が分かる会話文を入れた方が聞き手にとって分かりやすい」「お話のはじめとなかとおわりをはっきりする」「文の終わりは、『です』『ます』にする」の4つである。

比べ読みは初めての経験であり、抵抗を示す子もいたが、少しずつ言語操作を通して考えたり、分かったことを交流し合うことで、あらすじの書き方をつかむことが出来たことは、今後の学習の中で生きて働く力になるものと考えられる。その後、紹介文のフォーマットとして、ワークシートを示した(資料7)。ワークを用いて、「木の上にベッド」の紹介文を書いた。子どもは、つかんだポイントに注意して紹介文を仕上げている。始めは、大変そうであったが、どの子どももノートに下書きしたり、読み返したりして、紹介文を書き上げることができた。



資料8 お気に入りの王さま紹介ワーク1

みんなでモデル学習をして書き方を学んだあとは、一人一人が紹介したい王さまを決めて紹介文を書いた。ワークを使って、お気に入りの王さまの性格をまとめた(資料8)。次に、紹介文を書いた(資料9)。そして、紹介するための作戦を考えた。

ワークを使つての学習は、何をすべきが明確となり、全員が紹介文を書くために有効な手だてであった。

以上のように、紹介文をしっかりと書くことで、子ども一人一人が自分の伝えたいことをはっきりと認識することができ、紹介するための下支えができた。どの子ども、自分の紹介を聞いてほしい、友だちの紹介を聞きたいという気持ちが高まった。

③ 話し方、聞き方スキルの向上を図る

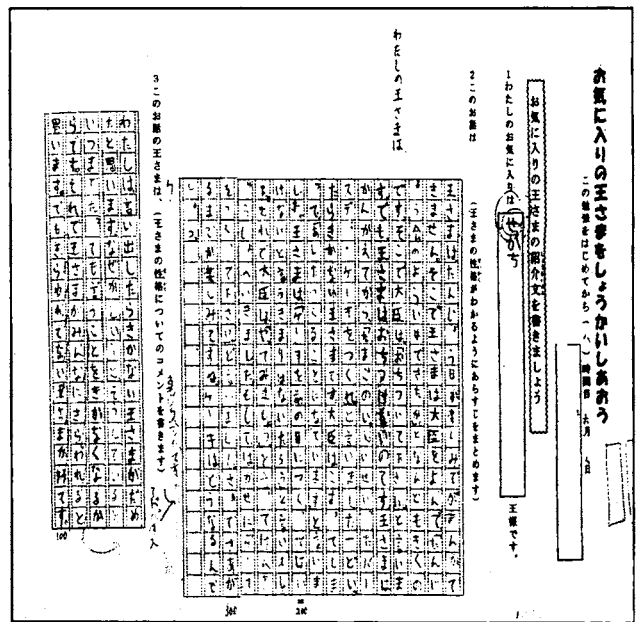


写真1 ミニブックトークの様子

- A: 今から「こいのぼりの空」の発表をはじめます。
(あらすじを説明する)
- B: (メモをとりながら黙って聞いている)
- A: そんな王さまがおもしろいと思います。ぼくのお気に入りの王さまは、どんな王さまか分かりましたか。
- B: 分かりました。
- A: 読みたくなりましたか。
- B: 読みたくなりました。

資料10 ミニブックトークの実際事例1

経験であるため、教師は、どの子ども出来ることを考え、十分な時間をとり、原稿を書かせた。そのため、子どもの意識がそれを読むことに終始してしまつたと考えられる。



資料9 お気に入りの王さま紹介ワーク2

今回は、ミニブックトークを設定して、紹介を行った。ブックトークは本来一つのテーマのもと、複数の本のおもしろさを紹介するもので、話し手が、聞き手に本の説明を一方的に行う意味合いが強い。しかし、本単元の学習では、一冊の本について、双方向の話し合いととらえた。読書は、本来、個人的なものと考える。本学級の子どもの実態を考えると、一对多の紹介では、他の聞き手に左右されて自分の思いを持ちにくい子どもが多くなると考えた。そのため、一対一の対話形式で行うことにした。全体をガイド役とゲスト役の二つに分け、交代して進めた。ガイド役の子どもは、自分の紹介するお話の看板を出したり、本を見やすく置いたりしていたため、ゲスト役の子は、自分の聞きたい友だちの所へ行って熱心に聞いていた(写真1)。

ミニブックトークは、3時間行った。はじめは、事例1のように、ガイド役の子がいっしょうけんめい自分の原稿を読み、説明し、ゲスト役がそれを聞いているというパターンが多かった。(資料10)。その原因は、紹介原稿を完璧に仕上げすぎてしまったことである。読書紹介は子どもにとって初めての

一回目のブックトークのあとの話し合いでは、全員が読みたくなった王さまを見つけることができた(資料11)。始め子どもは、どんな王さまを読みたいかを述べるだけであったが、C4が読みたくなった理由をしっかりと述べた。そこで、C4の話し方のよさを考えさせた。だが、理由は言いにくそうであった。しかし、C6から書いて考えたいという意見が出た。これにより、次の活動がはっきりした。そして、読みたくなったわけを付箋に書く時間をとった。子どもから、「もっと紹介を聞きたい」「紹介したい」との声が上がり、もう1時間ブックトークをすることになった。C4の発言を広めることで、他の子どもがそのよさに気づき新しい方向が示されたと考える。しかし、C8の発言を生かすことはできなかった。C8は、自分の紹介したい王さまと自分が紹介された王さまを比べながら聞いていたことが分かる。これは、聞き方としてはレベルが高い。これも、教師がしっかりとその良さを広め、聞き方のモデルと位置づけられる場面であった。

T1: 読んでみたくなった王さま、見つかりましたか。

(挙手多数)

T2: どんな王さま、見つかりましたか。

C1: 「誕生日のプレゼント」のお話のせっかち王さまです。

C2: ぼくは、〇〇さんの「ぞうのたまごのたまごやき」のしつこい王さまが読みたくなりました。

C3: ぼくは、〇〇さんのなまける王さまが読みたくなりました。

C4: ぼくは、〇〇さんの「王さまびっくり」の王さまが読んでみたくなりました。なぜ読みたくなったかという
と、自分でさせてとっておいて怖がっているから変でおもしろいからです。

T3: C4さんは、何をお話したかな。

C5: 読みたくなったわけも話しました。

T4: お気に入りの王さまを話すだけでなく、わけも言えるといいね。

(だが、わけが言いにくそう)

T5: 王さま見つけたけれど、お話できないんですね。

C6: いいこと考えた。言えないけれど、書けると思う。

T6: では、付箋に書いてみてね。

(子どもは付箋にお気に入りの王さまとそのわけを書き始める。)

C7: もっと紹介したい。

C8: 読みたい王さまは見つかったけれど、私の王さまがみんなの王さまとちょっと違うかもしれない。私は、「おうさましょうぼうたい」を読んだんですけど、他の王さまと違うかもしれない。

資料11 読みたくなった王様の話し合い

A: わたしの好きな王さまを当ててください。

(あらすじを説明する)

どんな手紙だと思いますか。

B: 悪口みたいな手紙ですか。

A: ちょっと違います。(続きを話す)

A: なぜ王さまは、笑ったのでしょうか。

B: はい、たぶん・・・

分かりません。

A: わたしの好きな王さまはわかりますか。

B: 子どもみたいな王さまですか。

A: あきらめない王さまです。読みたくなりましたか。

B: 読みたくなりました。

2時間目のブックトークでは、事例2のようなやりとりも見られた(資料12)。これを双方向的コミュニケーションのモデルとして、他の子どもに示した。子どもは、「ぼくらと違う」「キャッチボールになっている」とやりとりのよさに気づいた。「もう1時間やりたい」「もう少し紹介の練習をしたい」「今度は〇〇さんの紹介を聞きたい」との声が上がり、もう1時間ミニブックトークを行うことにした。3時間目は、2時間目よりさらに意欲的であった。友達の良い話し方のモデルを見たことで、自分の紹介の仕方をふり返り、よりよい紹介をしたいという気持ちが生じた。そのことが、より意欲的に多読したい気持ちにつながっていたと考える。

資料12 ミニブックトークの実際事例2

(6) 成果と課題

本單元における知識創造「王さまシリーズの紹介を通して シリーズ作品を読む楽しさを実感し さらに多読しようとする」についていえば、子どもは、おおむね達成できたのではないかと考える。それは、次の4つの子どもの姿から言える。一点目は、紹介ポスターをかく際に、子どもの方から「先生 まず 王さまの性格をずばり書くよ」「あとはあらすじとコメントも忘れないように」「読みたくなるように書かなくては」という声が上がった。そして、ほとんどの子が絵も含めて30分程度で仕上げてしまった。これには正直驚いた。子どもが、紹介文の書き方をメタ認知できていた。二点目は、紹介ポスターの内容である。王さまの性格をうまくとらえ、読む人にアピールした見出しになっている(資料13)。三点目は、読んだ本の数である。半分の子が8冊を読み、2年生にはやや抵抗があるであろうと考えた残りの2冊にも挑戦した。四点目は、子どものふりかえりである(資料14)。A児は、最初アンケートでは、本があまり好きではないと答えていた。しかし、この学習を通して、本を読む楽しさを少し感じたようである。他の子どもも、この学習を通して、むずかしかつたけれど挑戦してよかった、力がついた、というふりかえりがほとんどであった。B児やC児は学校の読書タイムだけでなく、家庭でも読書を続けたり、家族に王さまを紹介している。このことは、今までとは違った本のおもしろさを実感したことを示していると考えられる。さらに、D児、E児、F児は、読書の方法を自分なりに知っている。このことは、これからの読書生活の中で力として生きていくと考える。そして、新しい読み方で、さまざまな本を読むとしようとするであろう。この学習は、子どもにとっては、新しいことの連続であった。しかし、一つ一つのステップを確実に学習することで、これからの読書生活で生きて働く力がついた。



資料13 紹介ポスター

- A児：王さまは、わがままや意味不明のことがたくさんあったけれど、そこがかわいくておもしろいです。王さまの本を読んでいると、本が大好きになった気がしました。特に、「王さまたんけんたい」がおもしろかったなあ。
- B児：わたしは、家でも王さまシリーズを読んで、お気に入りの王さまがいっぱいになりました。長いお話でも大丈夫。
- C児：王さまの紹介が上手にできました。おうちでも、お母さんに紹介をして、喜んでもらいました。
- D児：主人公の性格と行動がつながっていることがわかりました。性格と行動をみわけられもう一度やりたいです。
- E児：違うお話でも、紹介ポスターがすらすらかけました。
- F児：始めは、あらすじやコメントを書くのが大変でした。でも、うまくできるようになりました。また、違うお話でやってみたいな。

資料14 学習のふりかえり

しかし、大きな課題も残った。それは、応答的コミュニケーションが不足していることである。双方向の伝え合いが十分にできているとは言えないのである。ある子どもは、自分の紹介を一方向的に話し、聞き手は黙ってそれを聞く。ここには、伝え合いはない。また、ある子どもは、聞き手に質問し、聞かれた子どもも答え、一見双方向の伝え合いに見える。しかし、本当に「わかってもらいたい 伝えたい」「聞きたい 分かりたい」という気持ちになっていた子どもは、まだまだ少ないのではないかと。どちらかといえば、どのように話すかが中心となり「聞く」ことに意識があまり向かなかった。4月から聞き方については指導してきてはいたが、まだまだ十分でなかった。今後は、話し手は聞き手を巻き込む話し方ができるようにしなければならない。聞き手は、話し手の話を受容的に受け止め、時には評価しながら聞くことも必要である。そうすることで、形式的ではない応答的コミュニケーションの力を身につけることができる。今後は、その力をつける学習を進めていきたい。